

佐伯梅友編
伊牟田經久

新校かげろふ日記

風間書房

佐伯梅友編
伊半田經久

新校かけろふ日記

風間書房刊

昭和39年4月20日 初版発行
昭和54年3月31日 再版発行

新校かげろふ日記

定価 一、二〇〇円

編者 佐伯梅友
伊牟田経久

発行者 風間歳次郎

印刷者 池田清

発行所

株式会社 風間書房

東京都千代田区神田神保町一の三四

電話(一九)五七二九番

振替東京一八五三番

(池田印刷・有朋製本)

凡 例

一、本書は、先に公刊した「かげろふ日記総索引」の「本文篇」を、大学における講読・演習に役立てるために改編したものである。

一、本文は、宮内庁書陵部蔵本（ただし、巻末の歌集はふいた）を底本とし、あらたに校訂を加えたものである。校訂にあたっては、つぎの諸点に留意した。

- 1 かなづかいは、歴史的かなづかいに統一した。
- 2 宛字は、正しい漢字またはかなに改めた。
- 3 活用語を漢字で記して活用語尾をおくっていない場合には、活用語尾を補った。
- 4 本文を読みやすくするために、かなに適宜漢字をあて、濁点・句読点などをつけた。ただし、かなに漢字をあてた場合には、ふりがなとして底本のかたちを残すようにした。

5 底本の乱れて通じないところは、他の甲類本（あとの項に示した四本）や先学の研究の成果を参考勘案して校訂した。

一、底本を改めた場合には、もとの形と他本の形を脚注に示した（ただし、前項の1234は原則としてとわない）。また、本書のたてた本文に対して異った改訂説のある場合には、脚注に示して参考に供した（ただし、写本・版本等の書入れにはふれず、解題等の旧注は注ぶかぎりあげるように努めた。しかし、引用に限度があるため結論のみを示した。詳細はそれぞれの研究について見られたい）。

右の場合、本文の該当する部分に ㊦ ㊧ ㊨ …… の番号をつけ、脚注と対照できるようにした。

一、脚注に用いた略号は、つぎの通りである（雑誌等の略号は初出のもの、の該文字を太字で示す）。

㊦ 宮内庁書陵部蔵本（底本）	㊦ 平安文学と漢語（平安26）
㊧ 国会図書館蔵本（上野本）	蜻蛉日記考（国語国文30年10月）
㊨ 大東急記念文庫蔵本（久原本）	蜻蛉日記考（大阪学芸大学紀要4）
㊩ 彰考館文庫蔵本（水戸本）	蜻蛉日記本文整理試案撮記（昭和33）
㊪ 無窮会神習文庫蔵本（井上本）	蜻蛉日記本文整理試案（国語国文31・5）
㊫ 上記五本共通のもの	蜻蛉日記考（平安18）
㊬ 底本をのぞく四本共通のもの	蜻蛉日記本文整理試案（平安19）23）
㊭ 坂 微 蜻蛉日記解環	蜻蛉日記本文整理試案（学大紀要6・8）
㊮ 田中大秀 蜻蛉日記解環補遺	蜻蛉日記の「さくなたに」（学大国文1）
㊯ 田中大秀 蜻蛉日記紀行解	蜻蛉日記本文整理試案（学大国文2・3）
㊰ 正宗敦夫 蜻蛉日記（日本古典全集）	蜻蛉日記（解釈と鑑賞36・2）
㊱ 武笠 三 蜻蛉日記（有朋堂文庫）	蜻蛉日記本文篇八玉上琢弥と共著／解説
㊲ 松井簡治 蜻蛉日記（国語国文学講座）	蜻蛉日記研究覚え書き（平安20・22）
㊳ 喜多義勇校訂の次の諸本	蜻蛉日記本文批判の方法（国語と国文学34・3）
㊴ 蜻蛉日記講義	蜻蛉日記の内面的展開に関する試論（日本文学34・10）
㊵ 蜻蛉日記講義	蜻蛉日記の文体構造と本文批判（国語と国文学35・3）
㊶ 全講蜻蛉日記	かげろふ日記（国文学35・1）36・8）
㊷ 川口久雄 かげろふ日記（雄辯社）	
㊸ 次田 潤 かげろふの日記新釈	
㊹ 大西善明	
㊺ 原田芳起 蜻蛉日記私注（平安文学研究17）22）	
㊻ 川口久雄	

一、日本古典文学大系『かげろふ日記』（川口久雄校訂）との対照を便にするために、本文の右側に・の印をつけ、その直下に大系のページ数を示し、大系のそのページがそこからはじまることを明らかにした。

解 説

かげろふのにき

『かげろふ日記』とその作者について記した最も古い記述は、『大鏡』の兼家伝の中に
見える次の一節であろう。これは、簡潔ではあるが、要点はほとんど尽している。

二郎君、陸奥守倫寧^{とくやす}ぬしの女の腹におはせし君なり。道綱ときこえし。大納言までなりて、右大将かけ給へりき。この母君、きはめたる和歌の上手におはしければ、この殿^{家兼}の通はせ給ひける程のこと、歌など書き集めて、『かげろふのにき』と名づけて、世にひろめ給へり。

『大鏡』も言うように、この日記の名は、作者自身の命名である。すなわち、上巻のおわりに、

かく年月はつもれど、思ふやうにもあらぬ身をしなければ、声あらたまるもよろこばしからず。猶ものはかなきを思へば、あるかなきかの心ちする、かげろふのにきといふべし。

とあり、《あるかなきかの心ちするかげろふの如くはかなき身の上の記》の意で名づけたことが明らかである。そして、その背景には、

あはれとも憂しともいはじかげろふのあるかなきかにけぬる世なれば（後撰・雑二、一一九二）

世の中といひつるものはかげろふのあるかなきかのほどにぞありける（後撰・雑四、一二六五）

世の中と思ひしものをかげろふのあるかなきかの世にこそありけれ（古今六帖・一、かげろふ）

かげろふのあるかなきかにはのめきてあるはあるとも思はざらなむ（宇津保物語・俊隆）
などの歌があったであろう。

この「かげろふ」が何であるかについては、古くからいろいろと論じられてきた。しかし、その用例から考え、また、右の『古今六帖』の歌が第一帖「天」の部の最後の「かげろふ」の項に他の八首と一緒に入れられていることを考えると、「陽炎」と解すべきかと思われる（「古くから」「蜻蛉」の漢字をあてること。根拠もなく適当ではない。）。ところが、最近、中晩秋または初春の快晴の日、ある種の蜘蛛の子が糸を出して風に乘じて空を浮遊するもので、「遊糸」「いとゆふ」「雪迎え」などと呼ばれるのがそれであるとする説が出された（「日本古典文学大系」）。この新説は、「遊糸」「いとゆふ」「陽炎」のいずれも同一物をさすとする従来の解とは全く異なるものであり、今後なお検討さるべきであろう。

しかし、「かげろふ」が何であるかということよりも、右にあげた歌や『古今六帖』の他の歌の中で、「かげろふ」が「はかなさ」を示すものとして用いられ、「あるかなきか」「ほのめく」などの語とともに用いられることが多い事実をこそ、重視すべきであろう。

道綱の母

『かげろふ日記』の作者の本名は不明である。藤原兼家の妻となり道綱を生んだところから、一般に「道綱の母」と呼ばれている。

父の藤原倫寧は、文章生出身の地方官（この日記や「尊卑分脈」によれば、陸奥・丹波）であり、『後撰集』に一首入集している歌人でもある（彼の手腕を示すものに、「小右記」長元五年八月廿五日の条に引く。）。母は、『道綱母集』（宮内庁蔵）の巻末勸物に従え

ば、刑部大輔源認の女であるが、これは信じがたいとする説が有力である。すなわち、兄理能（まさよ）の母が主

殿頭春道の女、弟長能（「ながよし」とも。歌人として名高く、その逸話は「袋草子」「古今本話集」などに見える）の母が源認の女であることは明らかであるが、日記に登場する同腹の「せうとなる人」を長能とは認めたがたく、理能とすべきだといふのである。その根拠は、『長能集』の勘物の「永観二年八月二十七日補藏人（三十六歌仙伝）」の割注を三十六歳の注記と見、それでは道綱の母と年令が隔りすぎるところにある。しかし、この割注は「三十六歌仙伝」の誤写であり、長能を同腹と認めてよいとする説（「和歌文学大辞典」の「道綱の母」の項）もあり、なお検討を要するであろう。理能・長能のほかに、姉が一人、妹が幾人かいたらしいことは、この日記にも明らかである。その妹の一人は、のちに菅原孝標の妻となり、『更級日記』の作者を生んだ。

道綱の母は、『本朝第一美人三人内也』（分脈）と称され、勅撰集に三十六首が入集し、中古三十六歌仙の一人にも数えられる才媛であった（「枕草子」の三〇九段（三巻本）や「袋草子」の「はとときす秀歌」の条は有名であるが、この日記の安和二年八月の条には小一条左大臣の屏風歌を依頼されたことが見えている）。その生年は不明であるが、天曆八年初夏のころ兼家と結婚、その翌年に道綱を生んでいる。しかし、兼家にはすでに長男道隆を生んだ時姫（藤原中正の女）があり、道綱の母と結婚してから、町の小路の女・近江・忠幹の女・兼忠の女などとの交渉があった。道綱の母にとって、その結婚生活は、まさに、愛の喪失に対する不安と嘆きの連続であった。『かげろふ日記』は、天曆八年（元嘉）から天延二年（元嘉）にいたる二十一年間の、その生活と心の記である。

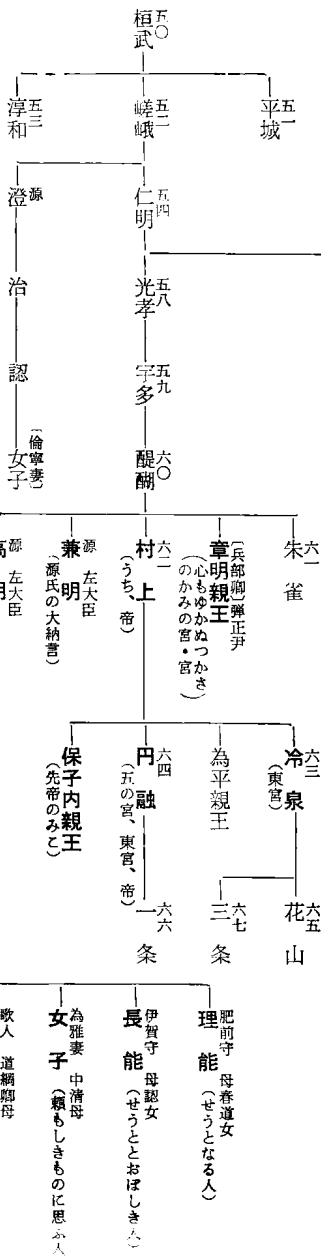
天延三年以後の道綱の母については、若干の歌などによってそのさまが知られる以外は、詳らかでない。その歿年は、『小右記』の長徳二年五月二日の条に道綱が亡母の周忌を行なった記事が見えるところから、その前年長徳元年五月二日とするのが通説である。

かげろふ日記関係系図 (太字は日記に関係ある人。注記は、主として尊卑分脈よりの抄出であるが、) 他に資料によるものを「」に、日記中の呼称を「」に入れて示した。

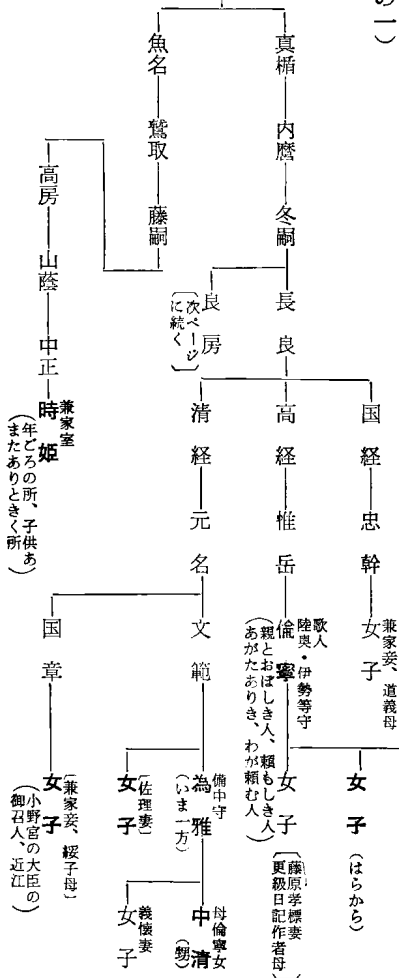
〔皇室・源氏〕

文徳^{五五} 清和^{五六} 陽成^{五七} 清^源 藤 忠^{参議} 女子

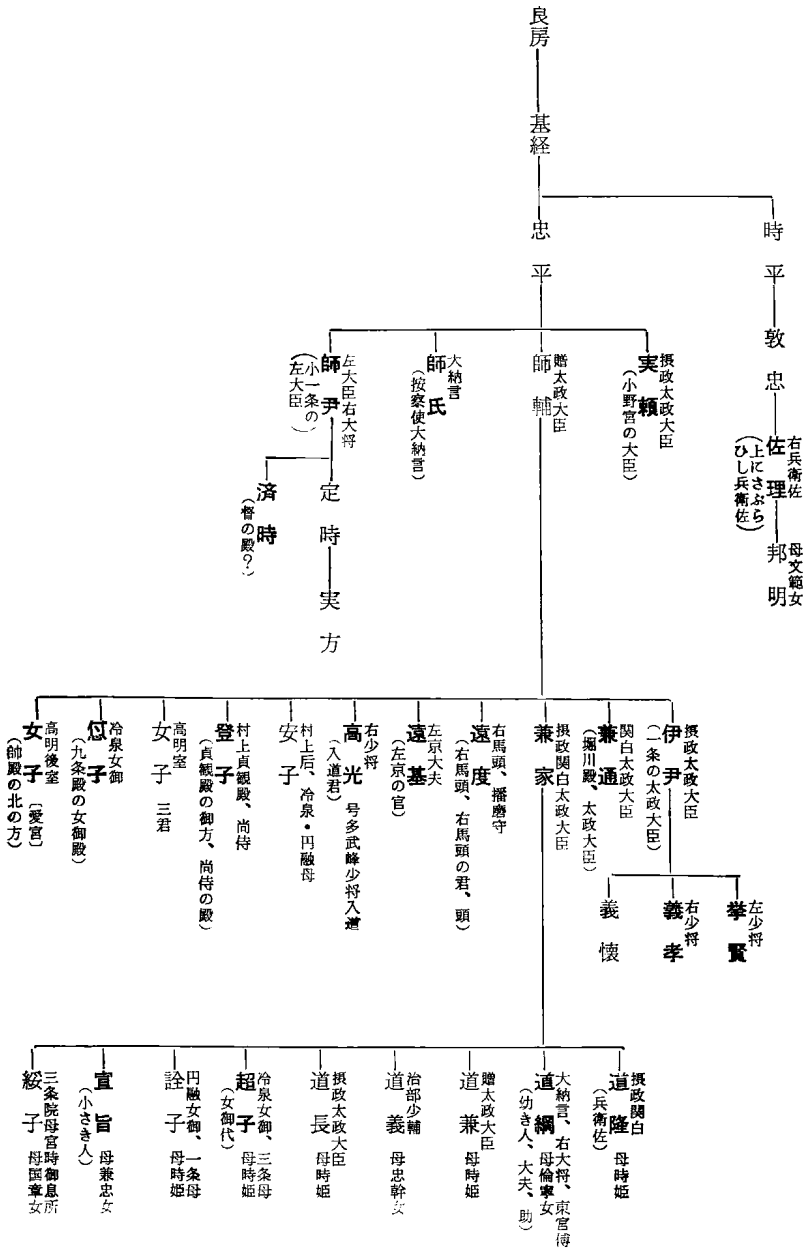
〔藤原氏〕 (その一)



鎌足 不比等 房前



〔藤原氏〕（その二）



日記執筆の動機と成立

『かげろふ日記』の序にも言うように、道綱の母は、物語の世界のそらごとをはっきりと否定し、ありのままの身の上(真実)を回想し、思惟し、書き日記することによって、自らの生きる道を見出そうとした。

日記は、はじめに歌の手控えなど(おそらく年代順になっていたであろう。作者にとって重要な事件であった「父の旅立ち」の記が、それだけであをもとにして上巻がまとめられ、ついで中巻・下巻が書きつがれて行ったものと思われる。執筆しはじめた時期については諸説があるが、天禄二年(九七二)の鳴滝の山寺ごもりが、半生を回顧し、自らの生きる道を考えるうえに、貴重な機会であったことを重視し、天禄二年の後半期ごろから筆をとりそめたとする立場を支持したい。

諸本と本文整定

『かげろふ日記』の現存写本のうち最古のものは、本書の底本とした宮内庁書陵部蔵本であるが、これとても江戸時代にはいつてからの本であり、それ以前の書写にかかる本はまだ発見されていない。しかも、現存諸本(校本に玉上彦弥・柿本契「精給日記 本文篇」および類本(本書の校訂に用いた諸本のほか、阿契沖の校訂は経ていないが中巻を欠く乙類本(東京教育大学蔵本、契沖の校訂を経た丙類本(静嘉堂文库蔵本・学智院大学蔵本など)の三類に分類されているが、本文の系統としては大きく一つにまとめられるものであり、諸本の校合によって訂しうるところには限度がある。多くは推測批判によらなければならないのである。契沖にはじまる『かげろふ日記』の研究の歴史の大部分は、いかに合理的な本文を整定するかの努力の歴史であったと言ってもよからう。近年の本文研究は、幅の広さと精確さを加わえ、新しい成果をもたらし、より正しい本文の姿が明らかにされてきているけれども、なお問題のある部分が残されており、今後の研究にまつところも多い。

「かげろふ日記 上」

*かくありし時^{とき}すぎて、世^よ中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世^よにふる人ありけり。かたちとても人にも似^にず、心^{①こころたましひ}魂もあるにもあらで、かう物^{もの}のやうにもあらであるも、ことわりと思^{おも}ひつゝ、たゞふしおきあかしくらすまゝに、世中^②におほかる古^{ふる}るものがたりの端^{はし}などを見^みれば、世^よにおほかるそらごとだにあり。人にもあらぬ身^みの上^{うへ}までかき日^ひ記して、めづらしきさまにもありなん、天下^③の人の品^{④しな}高きやと問^とはんためしにもせよかしとおぼゆるも、すぎにし年^{とし}、月^{つき}ごろのことも、おぼつかなかりければ、さてもありぬべきことなんおほかりける。

さて、あはつけかりしすぎごとくものそれはそれとして、柏木かしはぎの木高こだかきわたりより、かくいはずと思ふことありけり。例たとひの人は、案内おきなする

かげろふ日記 上（序・天曆八年夏）

*109

*110

○ ひゝ。こゝろたましひ。④ こゝろたましひ。
 ◎ やうり。④ 醒園醒えう、要、醒
 園やうり。▲萩谷氏(国文学34・7)参照▼
 ◎ おほかる。④ 醒(講古吉)おほ
 かつた。醒園(平安17)雪(校全)
 醒おほかる。④ 四「おほかた」
 ノ「た」ニ「る」ト傍注。萩谷氏
 (国文学34・7)参照▼
 ◎ かき日記④ 醒うき日記。醒(平
 安21)日記ハ重複誤写シテ、か
 きヲ除ク。
 ⑤ 天下④ 醒あめがした。真(古
 本)醒あめのした。▲因(平安20)
 参照▼
 ⑥ しなたかきやと——④ 記しなたり
 きやと。醒④ しなたかきやと。④ 岡
 一男氏へ、「しなたかきやど八家
 門」「道綱母」トス。
 ⑦ さても④ ▲萩谷氏「さても」
 (国文学34・7)参照▼
 ⑧ あはつけかり——④ あふのけかり。
 醒園あはつけかり。醒あいなかり。
 ⑨ あう／＼奥／＼なり。醒あはけ
 かり。④ 困へ「あへなかり」あた
 けに。(国語と同文学34・2)特
 考エウルトイウ▼

便り、もしはなま女などしていはする事こそあれ、これは、親とおぼしき人に、たはぶれにもまめやかにほのめかししに、「便なき事」といひつるをも知らず顔に、馬にはひのりたる人してうち叩かす。「誰」などいはするにはおぼつかなからず、騒いだればもてわづらひ、とりいれてもて騒ぐ。みれば、紙なども例のやうにもあらず、いたらぬ所なきとき古したる手もあらじとおぼゆるまで悪しければ、いとぞあやしき。ありけることは、

音にのみきけばかなしなほとゝぎすことかたらはんと思ふころ
あり

とばかりぞある。「いかに。返りごとはすべくやある」など定むるほどに、古代なる人ありて、「なほ」とかしこまりてかゝすれば、

かたらはん人なき里にほとゝぎすかひなかるべき声なふるしそ
これを初めにてまたゝもおこすれど、返りごともせざりければ、又、

① びなき——④ ひけき。
⑤ いひつる。⑥ 四いひつぎ。⑦ 園

めかし、うけひきごとし、いひつぎをもしらずがほに「トアリ」

⑧ さわいだれば——④ きわひたれは。⑨ 園四園さわいだれば。⑩ 関根慶子氏ハ「さ、わびたれば」ニ学

燈文庫、国文学 32・10) トス

⑪ まで——④ さて。

⑫ かなしな⑬ ⑭ ⑮ ——⑯ かなしき。△風雅、かひなし

⑰ こころ——④ ころ。

⑱ すべく——④ すへて。

⑲ かしこまり——④ かしこまり。⑳ かしこまり。

おぼつかな音なき滝の水なれやゆくへもしらぬ瀬をそたづぬる

*これを「今これより」といひたれば、しれたるやうなりや、かくぞある。

*111 ①やうなりや ㊤——窓 断やうなり、
やがて。

人しれずいまや／＼とまつほどにかへりこぬこそわびしかりけれ

とありければ、例の人、「かしこし、をさ／＼しきやうにも聞えんこそ

よからめ」とて、さるべき人してあるべきにかゝせてやりつ。それをし

もまめやかにうちよろこびて、しげう通はす。またそへたる文みれば、

はまちどりあともなぎさにふみみぬはわれをこすなみうちやけつ

らん

このたびも、例のまめやかなる返りごとする人あれば、まぎらはしつ。

10 又もあり。④「まめやかなるやうにてあるものと思ふやうなれど、このた

びさへなうは、いとつらうもあるべきかな」など、まめ文の端にかきて

そへたり。

いづれともわかぬ心はそへたれどこたびはさきにみぬ人のがり

かげろふ日記 上（天曆八年夏）

③あれば——㊤あれそ。

③われをこす——㊤われもたす。

④まめやか ㊤——㊤窓 断ハココヨリ
文言ト解スルモ、四ハ地ノ文トシ
「このたび」ヨリ文言トマシ

とあれど、例のまぎらはしつ。かゝれば、まめなることにて月日はすぐ

①にて——②にも。③にて。

しつ。秋つ方になりけり。そへたる文に、「心さかしらづいたるやう

にみえつるうさになん、念じつれど、いかなるにかあらん、

鹿の音もきこえぬ里にすみながらあやしくあはぬめをもみるかな」

④きこえ——⑤きこひ。

5 とある返りごと、

「たかさごの尾の上わたりにすまふともしかさめぬべきめとはきか

ぬを

げにあやしのことや」とばかりなん。又、ほどへて、

あふさかのせきやなになりちかけれどこえわびぬればなげきてぞ

ふる

かへし、

こえわふるあふさかよりもおとにきくなこそをかたきせきとしら

なん

*112

③ばかり——④はゝかり。⑤⑥はかり。

⑦せきや⑧——⑨せき屋 八底本「屋」ノ草体デアアルガ、助詞ト解スベキデアロウ。

⑩なになり——⑪⑫⑬⑭なるなり。

⑮解圖（講岩古）断なかなか⑯圖（平安17）四圖（校全）なになり。

⑰なこそをかたき⑱——新千載、なこそはたき。

などいふ。まめぶみかよひ／＼て、いかなる朝にかありけむ、

ゆふぐれのながれるまをまつほどになみだおほるのかはとこそ
なれ

かへし、

5

おもふことおほるのかはのゆふぐれはこゝろにもあらずなかれこ
そすれ

また三日ばかりの朝に、

しのゝめにおきけるそらはおもほえであやしうつゆときえかへり
つる

10

かへし、

さだめなくきえかへりつる露よりもそらだのめする我はなになり
かくてあるやうありて、しばし旅なる所にあるに物して、つとめて、
「今日だにのどかと思ひつるを、便なげなりつれば。いかにぞ。身に

かげろふ日記 上（天曆八年秋）

*113

① いふ④——△コロデ句点ニセズ、
「まめぶみ」ニ続ケルベキナ
② あしたにか④——△「カ」あした
か「トスルノハ誤リデアロウ」
③ おほるのかは——⑤④③おほる
かは。

④ かへし④——田かへりごと。△
ナド、「し」ノ右ニ「ッコト」ト
注スル
⑤ こゝろ——④ころ。

⑥ そらだのめ④——田（平安22）そ
らだのみ。

⑦ のどかにと——⑧のとかに、出
とかにと。

は山がくれとのみなん」とある返りごとに、たゞ、

おもほえぬ垣ほにをれば撫子の花にぞ露はたまらざりける

○はなにぞ④——露はなにちも。
○ける——④露四けり。露断ける。

などいふほどに九月になりぬ。つごもりがたに、しきりて二夜ばかりみえぬほど、文ばかりある返りごとに、

5

きえかへりつゆもまだひぬ袖のうへに今朝はしぐるゝそらもわり

○しぐるゝ——④しらるゝ。

なし

たちかへり、返りごと、

おもひやる心のそらになりぬれば今朝はしぐるとみゆるなるらん

④けさはしぐると④——入統拾遺、
けさやしぐれと▽

とて、返りごと書きあへぬほどにみえたり。

10

又*、ほどへて、みえおこたるほど、雨などふりたる日、「暮に來ん」

*114

などやありけん、

かしはぎの森のしたくさくれごとになほ頼めとやもるをみる／＼

返りごとは、みづから來てまぎらはしつ。